
長野市立博物館

紀 要

第 20 号
(自然系)

2019年

長野市立博物館

目 次

Contents

【事業報告】

戸隠地質化石博物館2018年夏の企画展

「めざせ!戸隠山～未知を求めて登った人々～」について

中村 千賀

1-7

例言

- 1 本号は、長野市立博物館紀要投稿規定に基づき集約された研究論文です。
- 2 本書の編集は、当館学芸員 成田健が担当しました。

戸隠地質化石博物館 2018 年夏の企画展 「めざせ！戸隠山～未知を求めて登った人々～」について

中村千賀*
Chika Nakamura*

* 長野市立博物館分館 戸隠地質化石博物館 〒381-4104 長野県長野市戸隠栃原 3400
Togakushi Museum of Natural History, Tochiyama, 3400, Togakushi, Nagano 381-4104, Japan

要旨：戸隠地質化石博物館において2018年に行った、夏の企画展「めざせ！戸隠山～未知を求めて登った人々～」について、その展示の構成や工夫した点をまとめた。

はじめに

戸隠地質化石博物館では、2018年の夏の企画展として「めざせ！戸隠山～未知を求めて登った人々～」と題し、戸隠山の登山の歴史を紹介する展示を行った(開催期間：2018年7月14日～9月2日)。この展示では、明治時代以前から行われていた戸隠山への信仰登山や、明治時代以降の近代登山の展開を、歴史資料などをもとに紹介した。また、戸隠山での学校登山や大衆化する登山の変化などにも触れた。

本来、地質を中心とした自然史分野を研究・紹介する博物館であるが、この企画展で人文分野を対象としたのは、戸隠山への近代登山の始まりに、トガクシソウ *Ranzania japonica* (T.Itô ex Maxim.) T.Itô(メギ科)の発見が大きく影響していたこと、また、近代登山以前の信仰登山のきっかけになった戸隠山への崇拝に、戸隠山の独特な地質が関与している可能性が高いことが、今回の展示を前にした研究で明らかになったからである。

この企画展では通史として江戸時代以前から現在の登山までを対象にしたが、研究が進むにつれて深く掘り下げて調べたい項目がいくつか浮かび上がってきた。本稿ではこれまでの研究成果として企画展の展示の概要をまとめることで、今後の研究の助けとしたい。

戸隠山について

今回の研究・展示の対象とした「戸隠山」とは、戸隠山系全体を指すものとした。その中で、山体のまとまりから慣例として3つのエリアにわかれているため、本研究もそれに倣った。1つ目の「表山」は戸隠山(標高1904m)・九頭竜山(1883m)を含む山系の中央にあたるエリア、2つ目の「西岳」は西岳(2053m)・本院岳(2030m)を含む西側のエリア、3つ目の「裏山」は五地蔵岳(1998m)・高妻山(2353m)・戸隠山系の最高峰・乙妻山(2318m)を含む北側のエリアである(図1)。

戸隠山系は本州の中央を南北に伸びるフォッサ・マグナ地帯の北西部に位置している。フォッサ・マグナ地帯は、新第



図1. 戸隠山系周辺の地図。国土地理院 50,000 分の 1 地形図戸隠より作図

三紀中新世に陥没して海底になった地域で、厚い海成層が堆積している。戸隠山系のうち表山と西岳は、約500万年前の海底火山の噴火によってできた戸隠火砕岩層からなる。これらは固結がよく、その後の隆起や風雨による浸食に耐え、切り立った岩壁となっている。やわらかい堆積層の差別侵食が見られ、また貝化石が含まれているのが特徴である。これに対して裏山である高妻山・乙妻山は、厚い堆積層の中に貫入したマグマが地下で冷えて固まった閃緑斑岩からなる。高妻山の山頂でこの緑白色の閃緑斑岩の岩体をよく見ることができる。

1. 信仰登山

明治時代に外国人によってスポーツとしての近代登山が導入される以前は、日本では登山は主に山岳信仰に根差すものであった。古代から山体そのものを神として、または神や霊が宿る神聖な場所としてあがめ、そこに入り神と一体となる行を積む修験が行われていた。これが7世紀に仏教と結びつき、教理や体制が整えられて修験道となった。

戸隠山でも同様で、古くから地主神として祀られていたと考えられる水神である龍神を、9世紀中頃に学問行者が山中の岩屋(龍窟)に封じたことが、戸隠山の開山と伝えられて



図2. 信仰の対象となった戸隠山系表山.

いる。龍神と戸隠山との関連は、戸隠山系が裾花川と鳥居川の水源であること、あるいは山容から、表山や西岳の尾根に龍が身を横たわる姿をなぞらえたとも、また春先の表山に幾つも表れる残雪の縦の筋が9つの龍の首に例えられたとも言われている(図2)。

平安時代末からは天台宗総本山比叡山延暦寺の末寺、戸隠山顕光寺となり、戸隠山三千坊と言われるほど修験の場として栄えた。この頃には、差別侵食によってできた表山三十三窟の霊窟での修行の形式が整えられたようで、霊窟の1つ西窟からは平安時代後期に遡る遺物が発掘されている。戦国時代の衰退を経て、江戸時代になると、徳川家康から寺領千石の寄進を受け、東叡山寛永寺の末寺に位置付けられた。裏山は、表山との鞍部の一不動に始まり、峰に沿って順に五地藏山山頂近くに五地藏、高妻山山頂近くに十阿弥陀、現在の乙妻山山頂に十三虚空蔵を祀る十三仏信仰の霊場となった(図3)。

嘉永2年(1849)に発行された「善光寺道名所図会」や明治期の戸隠一帯の絵図には、十三虚空蔵の奥の岩壁に「八尺円鏡」と「曼荼羅岩」が丸で示されている。閃緑斑岩が露出した白い岩肌を円鏡や曼荼羅に見立てたと思われる。裏山一帯は仏教の金剛界と胎藏界の両界を大地に広げた両界曼荼羅とされたため、両界山とも呼ばれた。十三仏信仰の普及により、庶民の登拝も行われるようになり、開山期間を旧暦の6月20日から7月15日までと設け、山伏が関料を徴収し案内をしていた。現在もこれらの十三仏の地点には、延享2年(1742)と刻まれた石祠がいくつか残されている。

幕末の文久2年(1862)には戸隠講の信徒によって高妻山山頂近くに直径63cmの青銅円鏡が奉納されている。また、江戸時代に編纂された「二十四輩巡拝図会」によると、高妻山には鎌倉時代初期に親鸞聖人が登拝し、阿弥陀如来の来迎に遭ったと伝えられている。戸隠での宿泊地とされる現在の中社區の武井旅館には、親鸞聖人尊像や阿弥陀如来図などの宝物が伝わっており、また戸隠地区内には親鸞聖人に関する伝承のある念仏池やカツラの大きな木もある。

明治時代になり政府による神仏分離令によって、顕光寺から戸隠神社となり、明治3年(1870)には戸隠山の女人禁制が解かれた。信仰登山は明治期以降も盛んに行われてお



図3. 戸隠山系最高峰高妻山。阿弥陀如来来迎の地とされた。

り、神仏分離の混乱の中で荒れてしまった登山道を、戸隠講の人々が復興した記念の石碑が奥社社殿近くに建立されている。また、明治15年(1882)には、東京上野の老舗薬舗の主人、守田安兵衛(宝丹, 1841～1912)が、妻トメ子を伴って高妻山に登っている。彼は非常に信心深かったことが知られており、後の人の登山の便がよくなるようにと、五地藏岳の山頂近くに小屋を寄進している。これは宝丹小屋と呼ばれ、昭和の初期まで登山者に利用されていた。昭和にも修行のために戸隠山に登る修験者が訪れており、昭和17年(1942)には姫野公明尼の呼びかけによって、三十三窟の復興のため、石祠が各窟に奉納されている。

2. 学術登山

明治初期、殖産興業を目指す政府は、国内の産物の調査を進めていた。その一環として明治8年(1875)に内務省博物館の役人、田中芳男(1838-1916)が率いる調査隊によって、長野県内の特に高山帯の調査が行われた。中央アルプス空木岳、御岳、飯縄山、戸隠山系高妻山、浅間山が調査対象であったが、空木岳以外は信仰登山が行われていた山であり、登山道が整備されていることに加え、宿泊場所や案内人の確保に便利な山が選ばれたものと考えられる。この調査の記録は詳細に残されており、高妻山に登る途中で丸い小石が多数あることに着目し、「河原や海岸のものと同じく磨耗しているので、一帯が隆起した証拠」と述べるなど、科学的



図4. 戸隠山中で発見されたトガクシソウ。

視点で登山を行っていることがわかる。また、このとき採集されたトガクシソウ(トガクシショウマ, 図4)の研究が進められ、明治19年(1886)、伊藤篤太郎(1865-1959)による日本人初の学名の命名へと繋がっている。日本の近代化を象徴する登山が行われたと言えるだろう。

一方、明治10年(1877)に日本初の大学である東京大学が開校し、理学部植物学教室の初代教授、矢田部良吉(1851-1899)は、教室の関係者と共に全国の植物調査を精力的に行っていた。明治17年(1884)には戸隠を訪れ、高妻山に登っている。その際にトガクシソウを採集し、小石川植物園へ移植した。その後、学名の命名をめぐる伊藤篤太郎との競争から、明治21年(1888)に矢田部が伊藤の教室出入りを禁止する「破門草事件」が起こり、トガクシソウや戸隠山は植物学界で知られるようになった。そのため、明治20年代から東大関係者を中心に多くの植物研究者が戸隠を訪れるようになった。植物採集の記録からたどると、明治23年(1890)に後の東大教授として著名な三好学(1862-1939)が、明治25年(1892)には桜井半三郎(1860-1933、トガクシナズナ *Draba sakuraii* Makino var. *sakuraii* を発見)、池野成一郎(1866-1943)が登山している。翌、明治26年に信越線が全線開通したが、松田定久(1857-1921、トガクシコゴメグサ *Euphrasia insignis* Wettst. subsp. *insignis* var. *togakusiensis* (Y.Kimura) Y.Kimura ex H.Hara を発見)、松平齊(ひとし、イワムラサキ *Lappula deflexa* (Wahlenb.) Garcke を発見)、牧野富太郎(1862-1957)が、明治27年には渡辺協(かのう、ハルユキノシタ *Saxifraga nipponica* Makino を発見)が調査に訪れている。

また、植物以外の分野では、明治27年(1894)に東京大学地質学科の学生であった山崎直方(1870-1929、後に東京大学教授)が、地質調査のために長野を訪れている。このとき戸隠山や裾花川で化石を採集している。

3. 近代登山初期

19世紀半ばに、ヨーロッパを発祥とする「アルピニズム」、「近代登山」の思想は、自然のありのままの姿である高山に登ること自体に喜びを得る、人生のうらおいとしての登山である。幕末から明治の初期に日本を訪れていた外交官や宣教師、政府のお雇い学者などの中には、日本の山に憧れをもつ登山の技術をもった人物もいた。彼らの興味は専ら、ヨーロッパでは珍しい富士山に代表される火山であり、県内では御岳山と浅間山、そして近隣の妙高山への登山が人気だった。また明治初期には北アルプスや南アルプスにも外国人が登山するようになっていく。特にイギリスの外交官で日本学の基礎を築いた人物として知られるアーネスト・サトウ(1843-1929)は、各地を旅行し山に登った経験から、外国人向けの日本のガイドブック『A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan』(邦訳「中部・北部日本旅行案内」)を、明治14年(1881)に刊行している。彼はその前年の明治13年に戸隠を訪れており、その経験もガイドブックの記載にいかされているが、戸隠山へは登っていない。「日本

旅行案内』は著者がB. H. チェンバレン(1850-1935)とW. B. メーソン(1853-1923)に変わり、内容を改定しながら大正2(1913)年まで9版が出版される人気本であった。第5版で戸隠山登山の記載が具体的になったことから、明治27(1894)年発行の第4版から明治32(1899)年発行の5版の間に戸隠山に登った外国人がいたことがわかる。

この時期戸隠を訪れたのが明らかな外国人は、フランス人宣教師、ユルバン・フォーリー(1847-1915)である。彼は布教で全国を歩く傍ら、植物採集を熱心に行い、ヨーロッパやアメリカの研究者へ標本を送っていた。明治31(1898)年に戸隠で、新品種タマコウガイゼキショウ *Juncus diastrophanthus* Buchenau var. *togakushiensis* (H.Lév.) Murata を採集しているが、彼が高山まで足を運んでいると断定することはできない。

戸隠山へ登った外国人の記録としては、明治37年(1904)のイギリス人宣教師ウォルター・ウェストン(1860-1940)とエミリー夫人がよく知られている。しかし、ウェストンが初の戸隠山外国人登山者ではないことは彼自身が著作に書いている。一方、戸隠山登山の難所、蟻の塔渡りで撮影された写真が残されているエミリーは、戸隠山の初の外国人女性登山者であり、それを記念するミセスウェストン祭が、平成9年(1997)から戸隠で毎年開催されている。

明治38年(1905)の日本山岳会の創設にも大きく影響したとされるウェストンであるが、山岳会はもともと日本博物学同志会の支会として誕生した。このため、初期メンバーには植物学に造詣の深い人物が多い。例えば武田久吉(1883-1972)は前述のアーネスト・サトウの次男で植物学者であり、日本博物学同志会の中心メンバーの一人でもあった。彼は明治37年に戸隠山でオオアカネ *Rubia hexaphylla* (Makino) Makino を発見している。

また、ウェストンを通じて日本の山岳写真をヨーロッパに初めて紹介した志村烏嶺(1874-1961)は、高山植物に精通しており、戸隠山に何度も足を運んでいる。彼は、高山植物を紹介する記事(園芸之友1906)の中で、戸隠山が高山植物の種類が豊富であるため、世間で評判になっていると記している。また、彼が撮影した戸隠山系の写真は、山岳会の初代会長である小島烏水(1873-1948)の初期の代表作、「日本山水論」(1905)に掲載されている。また小島は同著の中で、富士山が日本を代表する高山であることの比較対照として、戸隠山は深山の代表であると述べ、登山を推奨している。小島は同じく山岳会初期メンバーである高頭式(しき1877-1958)が著した「日本山嶽志」(1906)の中で、「戸隠奥山の絶嶽に遊ばずして、宇宙の大観を、縦(ほしいま)まに語る勿れ」と記し、高妻山からの眺望の良さを絶賛している。

山岳会の創設時、戸隠山は高山植物の豊富な山であるという点が特に注目されていた。これは、トガクシソウの発見による植物学者の一つの聖地という認識が、続いていたことを示していると考えられる。

4. 文学と戸隠山登山

明治以降、識者を惹きつけた戸隠山のもう一つの魅力は、「深山幽谷」に足を踏み入れる非日常の体験にあった。それは、神や仏が宿る信仰の地であることからうまれる神秘性に起因するところが大きく、信仰登山の影響が強いものと考えられる。文学界では、二葉亭四迷(1864-1909)と並ぶ言文一致体の先駆者、山田美妙(1868-1910)によって明治23年(1890)に「戸隠山紀行」が発表された。軽快で清新な筆致で長野から戸隠への行程や、登山のようすが記されている。言文一致体による最初期の山岳紀行文学である。

また、明治30年(1897)には上田市の実業家、飯島保作(花月 1863-1931)が戸隠山に登山し、その紀行文を「戸隠山壯遊記」として信濃毎日新聞に連載している。

さらに人気雑誌「少年世界」の読者公募企画で、戸隠裏山が探検の地に選ばれ、主筆の江見水蔭(1869-1934)が率いる戸隠山探検隊が組織された。明治34年(1901)7月に実施された登山には写真家や画家も参加していたため、8回にわたる連載記事に臨場感を増す効果を発揮している。戸隠の住人から成る5名の案内人(図5)や五地藏山頂近くの宝丹小屋など、写真記録としても貴重である。さらに特筆すべきは植物の専門家も参加しており、矢田部以来のトガクシソウの再発見がされたことである。上記の植物学者、武田久吉はこの探検記を読んだの登山であるし、後述する翌年の皇太子へのトガクシソウの献上につながっていく。

この探検の成功を受けて、明治35年9月に信濃毎日新聞社記者の東松露香(1867-1918)らが戸隠と鬼無里の住人から成る探検隊を組織し、裏山から奥裾花側に抜ける険しい山中を歩き、その紀行文を「戸隠探検」として新聞に連載している。

時代はやや下るが、昭和初期を中心に戸隠には多くの文人が訪れている。昭和11年から13年に4回にわたって戸隠を訪れ取材した川端康成(1899-1972)は、「牧歌」の中で「戸隠の巫女」という章を設け、叙情豊かに戸隠の人や風景を著している。また、詩人、津村信夫(1909-1944)は昭和9年(1934)からたびたび戸隠に滞在し、「戸隠の絵本」(1940)を残している。小説家、長與善郎(1888-1961)は戦後に戸隠で避暑をすごし「戸隠」(1949)を発表している。



図5. 「少年世界」に掲載された戸隠山登山案内人。

また高浜虚子(1874-1959)の「戸隠行」は昭和22年の滞在記録である。

林芙美子(1903-1951)は戦前戦後にわたって、戸隠に毎年のように通い執筆活動をしていた。大正時代にすでに避暑地として知られていた軽井沢に文化人が集い、長野の善光寺、さらに戸隠へ足を延ばすという流れもあったようである。また、昭和8年(1933)にNHKラジオで戸隠から日本初の小鳥の声の全国生中継が行われ、その後毎年6月に放送するようになったが、その影響で戸隠の自然に憧れをもつ人も多かったようである。尾崎喜八(1892-1974)の「戸隠と妙高」(1938)には、そのラジオ放送についての記述がある。

戸隠山に実際に登り、作品を残しているのは、版画家の畦地梅太郎(1902-1999)、そして「日本百名山」(1964)で知られる深田久弥(1903-1971)である。深田は悪天候のために高妻山への登頂を一度断念した経緯があり、高妻山を「心残りの山」として、再挑戦で登頂を果たしている。高妻山は百名山の一つに挙げられている。

5. 学校登山

トガクシソウの発見の地として全国的な知名度をもった戸隠山には、地元の植物研究者も多く通っていた。その中心となったのは長野師範学校(現信州大学教育学部)の関係者である。県内屈指の有識者が集まっており、また善光寺の近くという立地から、参詣道が戸隠へ直接通じていたというアクセスのよさも影響したと考えられる。

明治22年(1889)、長野師範学校の博物科教諭、羽田貞義(1864-1933)は、東京高等師範学校教諭で矢田部良吉の弟子の斎田功太郎(1859-1923松代出身)を戸隠山に案内している。このとき羽田によって、長野から戸隠までの行程で注目すべき植物種として、食虫植物3種、タヌキモ *Utricularia japonica* Makino、モウセンゴケ *Drosera rotundifolia* L.、ムシトリスミレ *Pinguicula macroceras* Pall. ex Link(図6)が紹介された。特にムシトリスミレは戸隠山を代表する高山植物となった。長野師範学校では明治24年から2年生の男子の博物学の授業で毎年戸隠山登山が行われるようになった。第一の目的は植物採集であったが、日本が軍国主義に傾いていた時代がら、「行軍」が大きな目的の一つとなっていた。心身鍛錬のため、休みの日も師範学校生たちは早朝から連れ立って戸隠山や黒姫山を目指していたようである。

明治34年(1901)に雑誌「少年世界」の企画で戸隠山探検が行われた際に、トガクシソウが再発見されたことから、翌、明治35年5月の皇太子(後の大正天皇)の長野訪問に際して、日本植物学界を代表する花、トガクシソウの実物をお見せするという計画が立った。当時師範学校の学生だった田中貢一(1881-1965)と戸隠出身の富岡朝太(1879-1959)は、残雪が覆う戸隠山からトガクシソウの株を掘り出し、学校内の温室で栽培、無事に皇太子へ花をお見せすることができた。その後、東宮御所へトガクシソウを献納し、報奨金を授かった。そのため、師範学校ではトガクシソウの花

をかたどった記念バッジがつくられ、在校生に配られた(図7)。そのデザインは師範学校の校章に採用され、現在、信州大学教育学部附属長野中学校の校章に受け継がれている。

また、トガクシソウの再発見と皇太子への献上を記念して、明治35年(1902)に師範学校の教員や生徒を中心に信濃博物学会が結成された。会長は師範学校教諭で後に松本女子師範学校の校長となる矢澤米三郎(1868-1942)で、編集主任は田中貢一が務めた。学会では、戸隠山に植物調査のためにたびたび登っており、明治37年には東大の牧野富太郎を講師に迎えて登山している。また同年矢澤は戸隠山でトガクシデンダ *Woodsia glabella* R.Br. ex Richards. を発見している。戸隠山でのトガクシソウの発見から30年を経て、長野の教育や文化形成の一つのシンボルとしてトガクシソウは受け継がれていった。

女子生徒による学校登山の初めとして日本の登山史にもたびたび紹介されるのが、長野高等女学校(現長野西高等学校)による明治35年(1902)からの戸隠山登山である。明治29年創設の長野高等女学校の初代校長、渡辺 敏(はやし 1847-1930)は、女子の心身鍛錬、「健全な母体の育成」を目的として、明治32年に女子の袴の着用と体育の授業を取り入れる。そして明治35年に学校行事として戸隠山登山を開始した。信仰の山に女性が入ること自体にまだ抵抗があった時代のため、周囲からの非難を受けつつも、この行事は大正14年(1925)まで続けられた。二代校長河野齡蔵(1865-1939)は大正5年(1916)にこの学校登山の際にトガクシギク *Chrysanthemum x konoanum* Makino を発見している。戸隠の神鏡とトガクシギクの花をあしらったデザインのブローチは、現在も女子生徒の襟元を飾っている。またこの登山を同校の教員で地質学者の八木貞助(1879-1951)が引率していたが、後に戸隠の民俗を調査した宇都宮貞子(1908-1992)は、戸隠に興味をもったきっかけとして、女学校時代の戸隠山登山と八木の講義をあげている。

その後戸隠山は昭和40年代まで、地元戸隠小学校や戸隠中学校をはじめ、近隣の小中学校や高等学校の学校登山の場であった。戸隠小学校の学校日誌には、昭和11年(1936)の夏休み中に、教員と児童有志が西岳を登山して植物採集をしたことが記録されている。

6. 近代登山発展期

大正時代には登山は様々なバリエーションルートを開拓したり、積雪期の登頂に挑むなど、パイオニア的な登山が重視されるようになっていった。戸隠連峰最高峰の高妻山を積雪期に初登頂したのは、後に文化人類学者となる今西錦司(1902-1992)やフランス文学者となる桑原武夫(1904-1988)らの、旧制第三高等学校のグループで、大正15年(1926)のことであった。昭和30年代からスポーツとしての登山がブームとなり、昭和39年(1964)に深田久弥によって「日本百名山」が発表されると、戸隠山や高妻山への登山者も増えた。昭和41年(1965)には長野市のグループ・ド・モレーヌと名古屋山岳会の4名が、積雪期の西岳連峰本院岳



図6. 戸隠山中のムシトリスマイ。

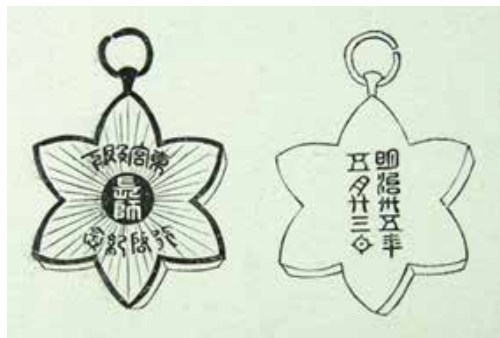


図7. 皇太子長野訪問記念のバッジ。田中貢一「信濃の花」(1903)より。

に初登頂を果たしている。また、昭和53年(1978)に長野県で開催された「やまびこ国体」では、戸隠山系を中心に黒姫山や虫倉山を含む一帯が山岳競技の会場となり、長野県勢は全種目で一位という好成績を取めた。

現在も日本百名山踏破を目指す登山者を中心に、戸隠山系には登山者が年間約3000人訪れている。戸隠山は標高が低く日帰り登山が可能であるが、難易度が高い山に指定されており、毎年遭難者が発生している。山岳ガイドを依頼するなど、安全な登山が求められている。

7. 戸隠山登山ガイドブック

戸隠山登山を紹介したガイドブックは、古いものでは先述した江戸期の「善光寺道名所図会」(1849)が詳しい。英語ではあるが「日本旅行案内」第5版(1899)では、表山と裏山への登山の記載がなされている。また、地元である戸隠の人物が記したもので古いものは明治36年(1903)発行の「戸隠山案内記」である。この中では戸隠山の紹介はあるが具体的な登山についての記載はなく、代わりに山田美妙の「戸隠山紀行」の一部が収録されている。また、戸隠山中で発見された奇草として「戸隠升麻」が挙げられている。

大正5年(1916)に戸隠神社社中協和会から発行された

「戸隠案内」には、戸隠山の登山についての詳細が記された「三山跋涉の手引」という章が設けられている。その書き出しは「奥社へ参拝に行く人は、足の弱い人を除くの外は概ね山登りをすると極つている」であり、「山登りは、如何なる人でも案内者がなければ遣りとげ難い」と、案内者を頼むように勧めている。また、裏山の登山ルートの一つとして現在廃道になっている「御沢通(大沢通)」も紹介されている。この本は内容を更新しながら昭和14年(1939)に7版が出版されていることがわかっている。登山の章については大きな変更はないが、7版では戸隠での登山対象の山の一つに西岳が加えられている。また、昭和3年発行の4版には、「戸隠登山案内」という折り込みページが加わり、簡単な登山地図、高妻山からの展望(7版では表山に変更)、高山植物のリストが挙げられた。また7項目の注意書きには、1つ目に「登山には案内人を要します然して名勝展望等の説明を求めて下さい」、2つ目に「案内申込所は中社、宝光社にあります」、また6つ目には「登山者には木札及び案内図を渡すことになって居ります」と書かれていて、地元住人による登山案内がある程度システム化していることがわかる。

昭和31年(1956)に戸隠高原が上信越高原国立公園に編入されると、戸隠高原を紹介するパンフレットが多数発行されている。戸隠観光協会発行の観光パンフレットには、戸隠山登山を「絶景奇勝が多い」と勧めている。この頃から登山者のための専門のガイドブックが大手出版社から発行されるようになり、戸隠山登山は広く大衆化されていった。

8. 展示について

今回の企画展では、登山史をテーマにした展示であったため、歴史資料が主な展示品となった。夏休み期間中の展示であり、登山に興味のないかたにも楽しんでいただけるよう、いくつか工夫を行った(図8)。一つは信州新町美術館所蔵の戸隠山を題材とした油絵と版画、また登山の古い絵葉書の拡大写真などを随所に展示し、戸隠山の山の雰囲気表現したことである。また、長野高等女学校の学校登山の写真から、袴姿の女性キャラクターを作り、展示の案内役とした。さらに、展示室前の廊下に高妻山登山のようすを紹介する市販のDVDの映像をモニターに映した。また、筆者が実際に戸隠山登山の難所、蟻の塔渡りを登っている動画画像を流し、臨場感が出るようにした。直接戸隠山とは関連はないが、昭和の時代に使われていたピッケルやロープ、登山服など、登山道具を展示するコーナーを設け、現代の登山愛好家も親しみやすかった。

また、展示室の中央に2つの体験コーナーも設けた。1つは重い登山リュックを背負ってもらうもので、幕末に高妻山山頂近くに設置された銅鏡と同じ約40kgのものと、戦前に三十三窟の復興を祈願して設置された石祠と同じ約20kgのもの、2種類を用意した。もう1つは蟻の塔渡りを疑似体験するもので、狭い登山道部分をコンクリートブロックを4mほど並べて模し、その両側に実際の風景の拡大写真を張り合わせて、高度感を表現した。これらの展示の工夫によって、来館



図8. 企画展のようす。

者に戸隠山の険しい雰囲気を感じてもらいながら、その山に挑んできた人々の思いを読み取っていただけたのではないかなと思う。

9. まとめと今後の研究の展望について

本稿では戸隠山登山について、明治以前から続いてきた信仰登山や明治以降の学術登山、近代登山、学校登山について主に研究し、まとめた。明治以降の戸隠山登山について、大きなターニングポイントとなる出来事は3つあると考えられる。1つ目は明治21年(1888)のトガクシソウの学名発表に関連する「破門草事件」である。これによって戸隠山が植物研究の聖地として中央の研究者に知られるところとなった。東大の研究者を中心に植物調査が積極的に行われた。2つ目の出来事は明治34年(1901)のトガクシソウの再発見と翌、明治35年の皇太子へのトガクシソウの献上である。日本山岳会によって日本アルプスの峰々が紹介されていく以前は、戸隠山が高山植物の豊富さから登山者が注目する山の一つであった。また、このできごとがあり、県内の教育者が学校登山の舞台に選び、教育の場とした。またトガクシソウをシンボルとして信濃博物学会を立ち上げ、教育や文化の発展に寄与していった。3つ目は大正時代から昭和にかけての登山ブームである。高妻山が日本百名山に選ばれたこともあり、多くの登山者が訪れるようになった。

また、登山をすることがスポーツや娯楽として一般化していったことに加え、交通の便が次第によくなっていったのも、戸隠山へ多くの人が足を運ぶ後押しとなった。明治26年(1893)の信越線全線開通、昭和5年(1930)の長野-戸隠間のバスの運行開始、昭和39年(1964)のバードラインの全線開通と続き、戸隠への交通の利便性が向上するに従い、登山の大衆化と伴って、登山者が増えていったものと考えられる。

登山者を迎える戸隠の住人側の意識も変わっていった。登山の案内は明治以前の信仰登山の時代から行われていたが、大正時代以降、戸隠で発行された案内冊子には、戸隠山登山の詳細が記されるようになった。登山のニーズに 대응するよう、案内者も組織化していったものと考えられる。また、

登山の知識をもった住人によって山小屋風のペンションやロッジが戸隠で営業されていくようになったのは、昭和30年代からで、戦後の登山ブームが始まったころであった。

戸隠山の登山の歴史を研究する中で、トガクシソウの発見がその後の戸隠山登山に影響を与えたことがわかってきた。今後はさらに自然史と登山とのかかわりについて明らかにしていきたい。これは、戸隠山を登山者がどのような意識でとらえていたのか、外部からの視点で戸隠山の魅力を発掘していくことになる。一方、登山者をガイドする案内人についても、研究を深めていきたいと考えている。こちらは戸隠の人々が登山者たちをどのように迎えていたのか、内部からの視点で戸隠山登山について見つめることになり、研究の新しい切り口になるのではないかと考えている。戸隠山の魅力を多方面から探し、深めていきたいと思う。

謝辞

今回企画展を開催するにあたり、以下のかたがたにお世話になった。長野西高等学校同協会、長野市立戸隠小学校、松本市立博物館、大西正一氏、加藤由美子氏、川口勝信氏、里野龍平氏、武井芳久氏、武井善信氏、武井善行氏、田村宣紀氏、秦孝之氏、林部直樹氏、松澤千尋氏。記して御礼申し上げる。

文献

- Ernest M. Satow & A.G.S. Hawes(1881)A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan. Kelly & Co.
- B.H. Chamberlain & W.B. Mason(1899)A Handbook for Travellers in Japan, Fifth ed. John Murray
- アーネスト・サトウ著、庄田元男訳(2006)日本旅行日記 1, 平凡社
- 畦地梅太郎(1953)戸隠の回想, ホテルレビュー44号
- 井原今朝男(2015)戸隠・飯縄の修験―戸隠修験は何処を目指したか―, 戸隠信仰の諸相, 戸隠神社
- 岩津都希雄(2016)伊藤篤太郎 初めて植物に学名を与えた日本人[改訂増補版], 八坂書房
- ウォルター・ウェストン著、三井嘉雄訳(1999)ウォルター・ウェストン未刊行著作集(上・下巻), 株式会社郷土出版社

- 江見水陰(1901-1902)戸隠山探検記, 少年世界, 7巻11, 12, 13, 15, 16, 8巻1, 3, 4.博文館
- 大町市立大町山岳博物館編(2007)よみがえる高嶺の草花―志村烏嶺旧蔵植物標本―, 市立大町山岳博物館
- 尾崎喜八(1936)雲と草原, 朋文堂
- 花月・曲峯(1897)戸隠壯遊記, 信濃毎日新聞社
- 川端康成(1937)牧歌, 婦人公論, 中央公論社
- 栗岩英治編(1916)戸隠案内, 戸隠神社々中協和会
- 桑原武夫(1969)桑原武夫全集, 朝日新聞社
- 小島烏水(1905)日本山水論, 隆文館
- 信濃毎日新聞社(1983)信州山岳百科Ⅲ, 信濃毎日新聞社
- 信濃毎日新聞社開発局出版部(1975)ふるさと信州, 信濃毎日新聞社
- 信濃毎日新聞社戸隠総合学術調査実行委員会編(1971)戸隠―総合学術調査報告, 信濃毎日新聞社
- 志村烏嶺(1906)高山植物, 園芸之友2,2, 12-19
- 棲碧(1907)戸隠裏山の宝丹小屋, 山岳2,1: 153-154
- 高頭式(1906)日本山嶽志, 博文館
- 武田久吉(1999)明治の山旅, 平凡社
- 田中貢一(1903)信濃の花, 荻原朝陽館
- 東松露花(1902)戸隠探検, 信濃毎日新聞
- 富岡犀川(1934)花鳥, 富岡朝太
- 豊田利忠(1849)善光寺道名所図会, 静観堂
- 長野県立長野高等女学校(大正3)戸隠山に就いて
- 中村千賀(2015)トガクシソウ, 戸隠地質化石博物館
- 長與善郎(1949)戸隠, 東京出版
- 原田尚季(2010)渡辺敏の女子教育論―長野高等女学校における集団登山を事例として―, 筑波大学比較文化学類卒業論文,
- 姫野公明(1963)霊峰戸隠の秘境に 千古の遺跡を探る, 酒井修一
- 深田久弥(1964)日本百名山, 新潮社
- 堀井正子(2015)戸隠を訪れた近代の文人, 戸隠信仰の諸相, 戸隠神社
- 松本市立博物館(2015)河野齡蔵―博物学者のProfile―, 松本市立博物館
- 三好学(1890)信州両毛植物採集旅行雑記, 植物学雑誌4, 43: 325-327, 4, 44:371-374
- 矢澤米三郎(1935)開会の辞, 信濃博物学雑誌1:1-2
- 山田美妙(1890)戸隠山紀行, 明治紀行文学全集(1974), 筑摩書房
- 了貞(1809)二十四輩巡拝図会 巻五, 河内屋太助

長野市立博物館 紀 要

第20号 (自然系)

発 行 日 平成31年3月31日

編集・発行 長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414番地 川中島古戦場史跡公園内

電話番号 026-284-9011 FAX番号 026-284-9012

ホームページ <http://www.city.nagano.nagano.lg.jp/museum/>

電子メール museum@city.nagano.lg.jp
